電子複写不可

昭和二〇・三・二三～二〇・六・末

白龍……海上挺進第二十六戦隊追悼記

二六会（海上挺進第二十六戦隊）編

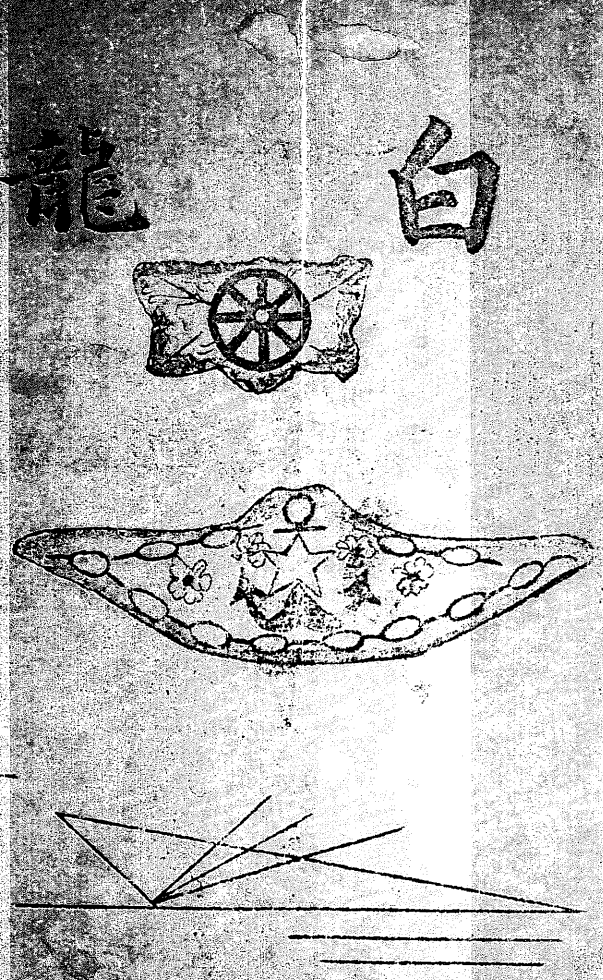
沖縄
297

複製史料

防衛研修所戦史室

白龍

海上棧進第二十六戰隊追悼記



沖縄戦

曙敵歸帶南西地
低機墜空船薄海
敷闘九旬一夢裡
萬骨枯臺走天外

昭和二十年六月二十二日
第三十二軍参謀長
陸軍中將　長勇　本

たぐいなき壁天に雲のかゝるども
はらい潮かん子等に傳へて

天照らす道は雨にかすむとも
新に歩む日の本の道

沖縄終末戦記

海上挺進第二十大戦隊

追悼記

見ふたたび起こる島の戦ごと
いかご謂らんくにの人等に

亡き戦友の遺骨遺品はさらはなし
さめて土かり拾ちて帰ちむ

無量に裂けて飛散る肉と血と
赤みにし島に秋は来にけり

目次

沖縄戦記……一頁
二十大戦隊戦記……九頁
中隊戦斗経過……三九頁
遺族通信……四七頁
戦友追悼記……一二三頁
沖縄島周辺地図……頁
略図……頁
二十大戦隊人名簿……二八頁
二大隊の皆様へ……二〇頁
あとがき……一四二頁

沖縄終末戦記

東海の果てない紺碧の海原で夢の如く浮ぶ島々！！　其は硝煙弾雨に白く砕け散り南風はアザミン茶の葉末にゆらぬて平和に明け平和に暮るる何々の赤屋根は朝暮に咲くあの赤い佛桑華の花咲世紀もの昔世界から悲涙原でられてる琉球沖縄の厄災を物語るかの如くであつた。何時迄も！！　続ることを知らない思惟の夢に浸り続けてゐる此の島に激しく戦火の嵐が吹荒ぶとは誰が想し得たらう。

ガダルカナルの惨敗はタラソマキンの玉砕となり相次でサイパンも陥るに及んで南国の楽園無敵く此の南洋の要衝を基礎とするに到りまに代へて空の要塞は本土生産重要都市の相次ぐ空襲となり其の猛なる可き機動力は比島の奪還に成功し遂に経済圏に進の手は延び延ろ可き運は次第に此の南海の夢の島に接近されて来たのであつた。之後第等は南方への大動脈たる南西諸島中、我の重任を荷ひて、遂は広漠たる南洋の原野より戦は硝煙おぞ生々しき大陸の原野より砲撃か戦場を馳廻つたつはもの達か時が鏡を転り食と取りて敵潜水艦出没張り巡ら盧の海を渡り南下し来つたのであつた。南東室蘭幾日数を日に夜に密々さち潜航下手は攻撃されるのであつた。故等は紅い佛桑華の花にも電海の雨を浴び波の音とも共に消ゆ悲とともかつた。只皆上と共に生き抜き抜き相手に戦ひ戦ひるのであつた。

来る可き時は遂に来た。敵大艦動部隊は西南太平洋の基地を発進しつゝ輸送船団を護しつゝあつた。

之れが第一到来は土原南岸に来襲しつゝあつた。

之れが第一到来は一旦撃退を清に取り正しく南西諸島に指向これ来つたのであつた。敵機は之れ等の等級は全滅に及へられ敵機は備の音を聞ひが飛ぐ情報を告げ張りなり。

敵正に沖縄本島を目掌かんとす。南海原頭生の魔、此の報に一度持する沖縄風雲身三十千軍

(巻)

麾下十万余の陸海空の将兵正に天を衝く。

敵陸海空三十三日敵猛襲本土上空を乱舞し敵機は其の周辺に集々と迫り来つた。明くれば二十四日全軍南西諸島に対して甲号戦闘はしかれ一遍の運命を賭けた大一番戦は愈然として降下された。

大なるに世界文明の頂点と謳歌し水泡塩りを巻と謂りを陥ケと何、琉球王の八間を矢ふを王沖縄を奪取すべしとの大艦隊を率ひ驕大なる物量と謂巧なる科学気器と加ふるに迫る愛し信する兵員を以って兵家の達人をば此の一戦に賭んとするに所迫此に既来るる

ごる天下分目の大決戦は今や世界の視線を此処に集めて凝固なる戦場の大舞台は切って落された。此の故河たるんば計かれ長く所可き、水漬く屍草生す屍豊の貴はたとへ忠義と見ゆるとも天皇の御盾と名乗れんと欲新十万山と海へ海に準備をこ〳〵盛りなり。一人十殺一戦

帰、此の一戦全国特攻の花蕾花の散り盛り花の散り盛り雲天陸海空を望んで悲壮の果天に翔つ。

ひ此の戦をこゝに生きに強く生けく来たるるたのを。天明山分や。天孫ひ数部隊は本島頂辺と

拠って鉄桅の布陣を固めて天山線程天に一十数百の勝しきに上る。就中激戦機空中戦隊乗合
機全島の蒼天遠く天文学的なる数その大の流れは花となく星となく大政の山野に注がれた。
屍はやけ野原は荒れて何々の赤屋根は首無き如く次々と崩れて行った。誰かこの戦場野の酒
果を想像し得たであらうか。破壊し尽された一台の車両が昼間其の姿を路上に死すや徒にし
て敵にして攻撃を忍び隠蔽を構へねばならなかった。敵機は此の残骸をすら攻ある限り翌日
もその翌日も執拗にして止まず並に昼は終日旋回して一翅の微動すら許さなかった。然り一度
昼けば壕洞掛け忍之を被じ突撃する迄只ち唯か死山死谷屠に敵するのであった。これ又恐る
なる兵士は赤せらるる然募鉄砲に突進して行った。戦火に焼けて灰々たる部落の城才に離
が落ちて一応新しく為然たる鉄兵士月然を出でそれぞれ敵を求めて出撃し家を失った住民は塗
炭の地を求めて彷ふのであった。 総裁の照明弾は打上げられ敵大は叫ぶ血を求めて咆哮す。
凄惨言語かな実く言語に絶す可き――――――
上陸以来血を注いだ陣営も遊撃も此一戦には役立つべくもなかった。制空海権なき悲惨
絆の下に泥にまみれ水草に伏し水に入りて将兵は悪戦苦闘を続けた。"友軍機来れ"!! 友
軍機が叫びはどの将兵の口からもついて出た。来る日も来る日も―― 敵機は空に満ち友軍機は一機
すら現はれて呉れなかった。唯特攻機のみ神人一如の境地を思はせ乍ら大型艦となって弱肉
の中に飛込んで行って呉れた。遠い夜の海に轟然と二ヶ大柱に閃煙を呑み閃々とひらめく砲
火の闇の中に突入して行く機の姿に感激あるのみ。斯くして敵艦を見ずして幾百の忠勇な士

は空しく硝煙の中に涙を呑んで散れて行った。
「草木も悲涙を流し　と万斛の涙を呑んで遙かな祖国の空を仰ぎ乍ら死んで行った戦友
よ。
援軍の喚声を夢に聴きつつ最後の勝利を信じつつ最后迄兵士として死んで行った戦友よ。
嗚呼!! 栄光ある日本、不敗の国日本!!
皇軍皆く大陸は勿論遠く南方諸島迄悉く伏せしめたる緒戦当時の空軍の誇らしき姿は何処に
ありや。 其の堂々たる雄姿を現すは何時の日か? 日本艦隊其はもう海に君臨し威
風たる堂々の行く先名実共に無敵艦隊の名をほしいままにしてゐたではないか。一度戦中
皇軍に武勇の実力を有し百戦練磨の猛の兵士よ、何処にありや。又彼は既に多数なる陸軍に参
げられてゐるではないか。戦争経済的に戦力なりや、此艦隊何の所。血潮に染まりし死にそれた
将兵の淵を溜をあない要塞に遊び寝ちのであった。知るや知らずや敵の制空制海権は遠く日
本本土迄に迄至され資金主力を失って戦力を喪失て今此艦隊を無能なき最後の末期も其の遠くは孤立
無援にして空しく壮烈にして終るのであった。敗れ去てられた小島は絶望の中で来るべき悲愁の日
を果なく待たに過ぎなかった。
嗚呼戦友への恨を告げず。叫ぶ兵よ。沖縄の戦争が如何に悲惨を極めしかを。兵士は酒
精神と戦う悲哀を味わう兵は傷つき戦又戦戦闘は月なく花でなく夜に聴こえ来るを待
つ。悲惨の戦を求めて永遠を求めて敵陣に突入して行った。飢えて食なく呑むに水なく残るに地

なく汗と泥にまみれ流るゝ血潮を拭ふもあへず進に一斛の軍需に曝露を凌し奮戦すれど近代
兵器と物量の前には如何ともなし難かつた。本隊の悲壮壮絶なる決死の攻撃の響
士は火焔放射器の餌食となつて屍を路傍に曝し山上の陣地を死守する兵は悉らに迫撃砲の雨
に銃火線は幾分所兵の生命を呑だ遂次々と倒れて行つた。気概と云はず軍刀と云はずあらゆる武器の近代兵器は其の機能を発揮する事も出来ずに破壊された。自動銃の威力は言語に
絶し黄燐弾はほとばしり口ケット砲は吼え、迫撃砲は紅へも如く炸裂した。
五十米の戦線主砲は沖縄の山河を震撼せしめた。異々と怎げ頭した赤土に数多の矢士と往
昔があたら草苔す屍と消えて行つた。迫撃砲と云ふ道路、傷々太ふ傷は見る影もなく焼え去り
建造物は迫撃砲の仕死の保障も其の甲斐なく砲撃のために次々と切断された連絡は絶えなんす可
き手段を見出し得なかつた。血風滲として輝く草木蔦家として声なき前戦場其処には天地も
なく物凄きなかつた。遂へ遂に敵は矢士達の敵と遂かなる怨恨を認め、数里の大母を悲嘆
ふのみであつた。実に制空権なき軍隊は二十世紀に於ては当然敗亡を意味するものであつた。
遂に死山血河!! 雨と注がれる敵量に抗し敵の挑発なる攻撃を防戦しつゞける自軍を基幹と
する陸軍部隊は数千幾旬其の精鋭の大半を失ひて敗勢頗るすくもなく遂に遂期の止むなき所候
に立ち到つた。軍司令官は大日初旬沖縄遠重地傳文化の要塞に本陣を後退せしめ残存矢力を
以て背水の陣を布き最后の抵抗をなすべく意を決した。此の報一度全軍に伝はるや最后の戦

狂なる抵抗を続けて辛くも生き残つた將兵と傷き足を失ひ血にまみれ泥に汚れ所
恥いた死者の遺骸を担ぎ乍ら南へ〳〵と下つて行た。今でも重傷者の後送は最も悲惨で
あつた。足を、胴を、腕を、眼を、と至る処傷々に傷を受けた敵の重傷者達は互に抱り合ひ
絶叫は忍に耐へ化膿した傷には蛆が湧き屍臭は生き乍らの苦痛に深つてゐた。
故一人で当をして其ゆるものなく暗ぎ一日幾何の道のりを歩き得たらう。左腕を失
た哀少な地区に辿り着いた敵は幾百の戦車を先頭に密集の如く押寄た。
最早眼くに近なく背後に迫る死の海が暴々と襲つて来る岩礁に波濤は砕け散つてゐた。
日毎夜毎刺一刻に迫り来る毒気と恐怖の中に眠ふに矢暮なく越すに術なく今や敵石の恐怖と
く唯徒に死屍を切へるのみ。解放の時りは其の刹那と共に地に捨てられ欲序相乱れて悲鳴
遂と矢つた兵士は三々五々死地を求て奮進し住民は此の悲惨酒に抵こ込れて悲嘆を続け許り
であつた。日章旗の除巻今や現に堂ちんとす。
翌の日日本降伏ありとも面謁を敢ふ日は果して何時の日か、祖国が国天の露と願つし降伏
は雪崩とも動量と潮流力との間に破くも壊え去らんとす。大日二十二日刀祢北矢盛で軍司令
官牛島満中将、参謀長、長勇、軍中將相次ぐ自刃。之に続く若干数知らず山に野に死屍に累
地に倒れ折り重なり血潮は紅に染が散つた。斯くて敵千九旬夢の如くに消滅し去り
左く迄で堅つた、怨へ敵える。遥し山、遥し河、遥を忘れの血潮に染みし山河でありつた。遥

七野市山も河も草木の屍は埋る人とてなく哀れ征らに函館の軍隊と相果てゐたつた。[illegible]
して居水悲く壮士一度去りて帰らず戦野に屍を曝すは武人の常とは云ひながら嘗先駆けて突進
し四辺にも劣るまじき誉ある殊功を立て伏られ何一つ報いられる処もなく異郷辺土の地に朽ち
く野辺の露と消し無名戦士の如何に哀かりしか。又沖縄の村に遂に万歳の声を聞くこと無
ある筑不の罪なき住民は全ての戦禍を被れ家を失ひ希望さえも奪はれて砲煙弾雨の中に基は
ねばならなかつた。子は親を失ひ、妻は夫に別れ、無心な幼児を抱いかし母が血潮に染んで
嘶ぎつゝ死に行く姿を見て之が果して皇国の一員で起た出来事と誰が思へよう。歌々として
咲き誇ぶ忠魂の叫びを聴け!!　戦ひ止みし今沖縄の山河にも秋色濃く清者支代せる迄にも
屋体頃八タ〜　と謳ふ四軍勢十万戦士の流血を要求せる沖縄の山河は歌せとして語らず、
勢ひ人とても生き残れる者たちはいみじくも歌草歳り、蓋すだく荒野も茶てに墓標を立て戦友
の冥福は慈天咲々とともに祈しくも朽果てゐる。静かに瞑目して耳を傾ければ血に染みて雄
図の屍に伏して行た後しき戦友の絶叫が聞へて来るではないか。英魂は果して何を語らん
とするか。声なき声は巷々に時代を警鐘を打鳴し、吾等が進むべき道を指示して止まず。偶
去られる戦友よ。天皇陛下萬歳を叫んで砲声弾々たる野末に斃れて行く時、君が眼に浮びしは
故郷に残せし父母の事ではなかつたか。英魂よ。事業たる八紘の海原を越えて速く早々と帰
しき母の慈愛の胸に帰り安らかに永眠かりて頂りませ。武運拙き吾等が祈りは切々と絶ず今
は大自然に融てもの、連綿一路の墓道の事を見つめてゐる。昨日の山は一日にして旦々なる

八

不遇と化し昔の道は夕には広大なる道路と変ず。栄ある可き近代文明の機構力は此の誇り高き、
夢の麓を踏破して行た。繁栄に栄はれてゐた祈せの吾敵を更に今く詩小原を欲つ始め
ひ、不見識に発式へと思解の生涯を浮雲の彼里へ到らんとす。
遥かに今金城の海を去来する白鷺を歌ひ城川云た鹿児に思ひを致す詩吟か一編力涙なきを
得ず。百合の花天神祭時と咲りし頃迄よ　ーーーーー
「水里の恩主として其の名を記は永敬れる事を知らなかつた祖国よ、今現実は苦悩なく敗者
の名を語せり、也辺へる人とてもなき無然の道に敗残の姿と成れし心を抱きて吾等は帰らん
とするか、嘗敗れた山河あり。
秀麗の山河連りて白雲石古の著士と紅ぎ白汀盆水流しき渓流に相馬よ!!
唯待つ人はあらずとも悠久に変らざる山河あらざ生る屍に祭りて吾歌て行かん。千旦寄せ
来る波は何を語き何を語らんとするか、石洗恵山谷んとして夕陽は天に赤く染ませ恋ひに
心切々と千々に乱れて止まず。嗚呼!!　天も哭け!!　地も哭け!!　勝り行かんとする大
いなる厂次は衣頂限りなき人類の悲劇を呑んで大海の彼方に流れ行かん。

（二〇・一一）

沖縄島　石川　收容所にて

第二十六戰隊戰記

海上挺身隊敢闘の由来とその内容

昭和十六年十二月八日、日本ノ空上に空前の出来事として永久に忘れる事の出来ない対米英宣戦の詔書が布告されてから、開戦に於ける日本軍の絶対的勝利は、ハワイ空襲・香港星港攻略と続くゴアム・ミッドウエイ・比島・セレベス・馬来・ボルネオスマトラ・ジャバから、更に濠州・印度洋へ次々に進攻作戦を展開し、ある程度「絶対不敗の態勢」を確保することが出来ました。然しながら、この絶対不敗の態勢も、人的、物的に膨大して行く消耗には如何ともなし難く、口には長期戦を唱えながら、永続的戦斗を強行せんとした事は、余りにも無謀であり（自らを知らず、而して他を知らず）の敗戦への秘密的結果を招来したものともいへましょう。

対米英宣戦布告に於ける日本軍の優位は、その後に於ける米国の悲壮なる巻返し、それに並行する我が国の全面的疲弊により、ミッドウエイ海戦を契機として「日本軍不利」の報者なる事実が次々に惹起して参りました。それに伴ひ、我が国の拡大せる戦線の統一性、戦線の分野が大なれば大なる程、そして履歴なる立体戦への進展と共に逐次不可能となつて参りました。アッツ島玉砕以後の各線に於ける相次ぐ転進々々玉砕々々の事実

九

五、その報道は、国民的敢闘心を感激すら及ぼしたが、また国民に対しては示すべき結果への新なる不安の情を起こせ始めました。然々たる戦果の半面に於ける玉砕々々の事実は、その文字的吉祥の美しさにもかゝはらず、実際には軍の作戦上に於ける敗北と退却なければなりませんでした。国民の間に起る軍への不信の情は、不可避なる陸海軍の作戦上の分離と時間的矛盾なりとまで思考させる様になりました。が、それは、ハワイ空襲、ミッドウエイ海戦、サイパン玉砕、硫戦といふ三段階に於ける戦斗経過をあらためて想起し、またその間の長期の経験を熟考します場合、適確な判断であったといふ事が出来ませう。

近代的戦斗に不可欠の陸海軍協同の立体的戦斗が事実上不可能となった場合、唯一無二の勝利を得ずして居る場合、そして飽くまでも戦斗を敢行せんとするものにとって、新鋭の戦斗方法血路からるべきは当然であります。陸海軍の協同戦斗の分裂の結果は、陸軍に於ける海上戦斗組織の新鋭部隊となり、その結果、陸軍にして而も陸上部隊にあらざる海上戦斗員にして而も海軍にあらざる、我が国軍に於ては新らたなる部隊名と云ふ名称が生れたのであります。

而る所謂に於ける船舶兵の在籍そのものは、戦斗経験に於て最も重大要素たるべき経験者、之の直接的表現と何等かの関係を生じて差違せんとして、空軍部隊に於ける特別攻撃隊乙部隊に、海上戦斗部隊に於ける特別攻撃部隊へと変って行ったのであります。輸送を本務の主務とした船舶兵の中には、所謂海上挺身隊の新鋭さ、それは、海上挺身隊と

一〇

呼称されたのであります。海空軍競争に遅ちゆとした陸軍は、自ら海空の任務を補足した陸軍の「海の特攻隊」を新設したのであります。

「潜水艦」の名は聞くと云ふ言葉がありますが、軍のこの（海上挺身隊）に関する問題は捷して知るべきであります。

陸軍の「海上特別攻撃隊」即ち「海上挺身隊」が如何なる内容のものであるかと云ふことは、一般国民には余り知られて居りませんでしたので当然のことでありますが、現在終戦となった現在、その事を御遺族の皆様方に御報告します事は最も意義ある事だと思ひます。

次に「海上挺身隊」に於て使用しました兵器は一口には軍でいへば（レ）と申してきました、長さ約五米、幅約一米半、中央に機関を設置し、その後方に搭乗員座席があり、艇尾には一二ヶ所の爆雷二個を乗せる仕組になってをります。艇体はベニヤ板で出来て居り、機関は仕組に自動操縦機械を組込まれ二ヶ所以上とされて居ります。この物的条件に依って而も最大の效果を挙げるために、如何に軍が苦心したか、想像に余りあるものがあります。

尔子時代とまで云はれる近代の戦争に、斯る兵器の使用が効果実績に如何に困難であるかは、事に物的たのみ推測されれば勿論何人にも即座に判断がつきませう、結局效果実績の点は単なる物的条件のみに依らず、他の何らかの条件を必要とするといふ事が出来ます。

即ち、人的問題であります。艇を動かす搭乗員が、物的に最悪の条件にあるこの兵器を、人的問題に於て最大の效果を実現させるべく条件づけられてゐるのであります。このために搭乗員の選抜に、軍は最全の策を講じたりであります。国軍に於ける最高の精神的、肉的、技術的見地条件の長所者が必要とされたのであります。そしてこのために、同期部隊は云ふに及ばず、大陸その他の各戦線から、幾軍の精鋭が本土の江田島にある教育隊へと参集して参りました。そして短期日の中に一切の訓練を完了したのでありました。

戦隊長―戦隊本部（戦隊長以下一一名）

- オ一中隊
  - 第一小隊（長以下五名）
    - オ一組（三名）
    - オ二組
    - オ三組
  - オ二小隊
  - オ三小隊
- オ二中隊
- オ三中隊（オ一中隊と同じ）

剣宮以下一口、戦隊長の指揮下に三個中隊（一個中隊三―一名）、更に中隊長の指揮下に一個小隊（一組小隊長以下九名）あり、小隊は更に三等分の組が三組ありました。つまり

戦隊長以下一口四名からなつてをりました　次に戦斗方法ですが、これは戦隊長が命令の下に中隊長の指揮を受け、各組毎の三名単位の戦斗方法、即ち吹矢式、眺望式、眺望式と等しい方法であり、この三名が一単位となり、敵の輸送船に肉迫して攻撃するやうになつてをりました。然しこの戦法には、諸種の條件やまた戦術等に於りかなりの困難性もあつたわけであります。沖縄に於いて「二十大戦隊」は各個の攻撃戦法を用ひました。

見に海上挺進隊の内容の一切を知悉し、その策を講じてゐた米軍に対して、戦大の効果を実現のために採用した戦隊の方法であります。

以上簡単な説明でありますが、海上挺進隊の内容がお解りになられた事と思ひます。

このやうにして、最初は輸送船の攻撃を才一目的とし、自爆して輸送船と共に散華するやうになつてをりましたが、その後戦隊に於きましては、輸送船一隻に肉迫し、爆雷投下後直ちにそのまゝ離脱するやうに爆雷投下法を改めました。また本来の輸送船目的も、その後諸條件に依り沖縄に於ては巡洋艦その他小艦艇の攻撃も実施したのであります。なほ爆雷は投下後四形にして爆発し、この艦に四口―五口米の巡洋艦が位撃でありますが、このために極り整備とその攻撃方法等に、各戦隊員が如何に工夫と訓練を重ねたか、まことに想像以上のものがあつたのであります。

以上が海上挺進隊の由来とその内容でありますが、次に第二十大戦隊記を思慮しつゝ申上げます。

4、昭和十九年九月　日、第二十大戦隊要員の江田島教育隊集合と已隊の編成

或は特地の所属部隊から、北は北海道から南は九州或は遠く大陸の戦野から、新なる任務に就すべく、広島の宇品港を去る遠く四十哩の江田島に参集致して参つた者は、当時陸軍大尉たりし故で立花武夫下將故一五名、下士官九十名でありました。第年に亦たる精鋭、用亦的一切の試練を体験し、如何なる困難に直面しても敢闘だもしない猛ばれたこれ

水の兵軍の中堅幹部一口五名は、国軍再建の興亡を双肩にになつて、欣も離なこの日、既に特米戦手通試以来、遠く南方各戦野に厂戦、幾度か死線を突破した当時二十大才の青年將校

敵故足立班生武は、いやが上にも引き行く情熱の迸りを若き髭鬚に譬めやかせながら、唯一言丁御苦労であつたしとひとこは遠く申これました。この時同一口五名の者は一切を感激し、豆く〳〵語ばれたのでありました。

次いで当時陸軍中尉であつた故海田曉行氏の盛確なる語示の下に、第一・第二・第三の三已隊が編成され、一口五名は同一共合四に隊員と共にすることになりました。時期に展開なる日々の生活は同時に此全員は唯々自己の目的兵理に一切を指向したのであり

ます。

ロ、九月　日―十月三十一日　旅団隊長の教育訓練

この期間は大隊別により各区隊毎に、或は全旅団隊合して所謂「海上挺進攻撃隊」としての訓練を実施致しました。十月ともなれば既に朝夕の冷風は身に沁みる時もあります。まして海の風が吹きまくる早朝深夜の訓練には、海水を全身に浴びながら、白球を泡立てて走る時及び陸の外部上の摩擦にも耐らず、それは実際に経験しなければ解する事の出来ない苦痛がありました。泳ぎ皆め海水を全身にかぶり、自らの感覚を失ひながらも程って離さない熱意には、眞赤の血が通ってをりました。そこには一切の雑念を忘れ切った若い時代のあふれるやうな血の流れが脈々として躍打つてゐたのであります。

日々に募つて行く猛訓練を平行して、日曜休日の休息の一日は、明日の訓練への準備と共に楽しい一日でもありました。一つ五名の者は各区隊毎に、或は戦隊員一同共に江田島岩屋の草を求めて山に登り、遠く中国の連山を眺めて居、故郷の親族に、或は山河に想いを馳して、雷鳴や蛙鳴に愛嬢を慰めるの一時もありました。

ハ、十一月七日、海上挺進隊動員下令

歌謡曲なる九月　日習間の中に初めて一口五名の者が会同して固き契を結んでから一ヶ月余、その間は短時日ではありましたが、吉諾に発する猛訓練を経て、愈々この日、一つ五名の者に動員令が下令されました。海上挺進第二十大隊は戦隊長足立陸生大尉の指揮下

出撃命令を待つべく動員が下つたのであります。一つ五名の感激は如何ばかりであつたでせう。

軍装に威厳を正した戦隊員は、当時の船舶部司令官より親しく慰笑を受けたのであります。

二、十一月一日―七日　戦隊旅合訓練題目

動員下令を受けつた第隊は愛機をそのまゝ、戦隊長以下全員乗艦の訓練の成果をより效果あらしむべく猛訓練を開始しました。この一題目は実戦に所した種々の訓練を実施しました。その中でも特筆すべきものとしては、江田島一巡航行と、江田島から山口県の一島への旅行訓練でありました。三田島一周は大隊の腕に吸せんとする特色を期して出発、豊早朝帰営して参りましたが、この再度の夜間の長距離航行は、来たるべき新戦場に於ける精攻隊としての任務完遂への若鷲振りを想はせるに充分なものがありました。

木、十一月八日　爆雷投下演習

訓練も愈々完成し、在想出撃を今日か明日かと待期してをりましたが、この日第二十大隊隊長その他戦隊台間の爆雷投下演習が実施されました。二百四十何の深度を調整して傾斜に傾斜し、実際に爆雷を投下したのであります。戦隊員一同は、如何なる艱難辛苦をも厭問にして海底の藻屑と化せしめる攻撃の生命たるこの爆雷の実際的効果に対し、愈々自信を得たので

あります。尚この演習攻下猛習に於きましては、多数の貴重な教訓を得ました。

ルの者に供しつゝ、愉快な一夜の宴を開いた事もこゝにお知らせすべきであります。

ヘ、十一月廿日―十一月十一日　任地出発前に於ける特攻隊員の心情は、敵国せる猛訓練に改つて今や精神的にも肉体的にも特攻隊員の心情は、敵国せる猛訓練の出陣を間近にして、出撃の日今や遅しと待つてをりました。さうしてあれあれの任地は果して何処か？　これこそ戦隊員一同が熱く注視してゐた事であります。恐らく戦隊長唯一人だけには話に聞然としてゐた事でせう。そしてそれを精神的に息に自心一体となつてゐた一ヶ五名の部下に対して一言も明かされない処に、戦隊長としてはたとへ公務のこゝとは云へ世間はどの冷たしく思はれて居つたかと云ふ事は、日頃戦隊長の気質をよく知つて居たものにはかりかねるとつぶやきました。そしてまたそれを表へて知らうともせず唯戦隊長の命令一下永久をも許せざるの日頃の心情へ帰つた一同であります。

何時かヨカ時が来たら、[illegible]しかし、恐らく用ひ生き[illegible]することの出来ない政府の親愛なる我々共をかたぶけつつ　[illegible]の[illegible]する[illegible]の[illegible]人の目的見現に一[illegible]敢然として行く特攻隊員で人間性の解放した美しさが　[illegible]と共に、[illegible]人間をそうものと解放してゐたとも云へませう。この何のためだ特攻隊員にしてもはじめて知ることの出来ない深なる本敬であります。

口には出さねども各人の一切を断念する情は一つでありました。何時如何なる場合にも著く美しく、人間に満ちず敢うんとする心的修練で全の準備を默々の間にして居つたのであります。

ト、十一月十二日―十三日　特攻受領の日

愈々戦隊員一時の特攻受領の日が参りました。

日頃の訓練の成果を挙して運命を共にすべき搭乗員各個人に前後これたのであります。自ら導き上る搭乗の勇猛と覚悟を如何ともする事が出来ません。そして引渡された機に直ちの要請を挙げて、誠るお日後まで機の整備に余念がありませんでした。

チ、十二月十三日　出撃日時、任地決定特攻隊込み、

「任地沖縄島　出撃十一月十四日午後三時」と心待ちに待つた在丸も出撃の日時が戦隊員一同に公表されました。何時でも出撃出来るばかりにまつてをつた戦隊は、最後の出撃準備たる機送船への特攻搭乗員を実施しました。各特攻を戦隊員同志に頭れの盃の応ひを捧げ隠すこと御出来ないかのやうに、快いエンジンの響を自分の天命とも云へでさるかの戦隊員に伝へてゐました。この日特攻隊員は手を更り歩し、一部を除して部々出撃しました。

リ、十一月十四日　特攻隊員と搭乗員上船、出撃

愈々遂に出撃の日が参りました。生きて再び祖国の土を踏まざる日を天意を信じ涙を